

戦後70年語り継ぐ戦争の記憶

中国人強制連行の足跡 1937年全面抗日戦争

中国人強制連行の足跡

「外務省報告書資料」 間組・瑞浪出張所

資料・記録からその実態をさぐる

● 疎開児の戦争体験
1991・1・1・8

● 歴史に埋もれた中国人捕虜の生活
1993・3・10



加藤 明 編

中国人強制連行の足跡 1937年全面抗日戦争

「外務省報告書資料」 間組・瑞浪出張所

資料・記録からその実態をさぐる

第一部 中国人強制連行と戸狩山地下工場建設工事（間組瑞浪出張所関係分）

一、中国人強制連行の歴史的な経緯

(1) 法的根拠による強制連行はどのように行われたか

「華人労働者内地移入ニ関スル件」東条内閣閣議決定

(2) 中国人の「強制連行（供出）」はどこで、どのように行われ、日本へ連行されたか。

「中国人強制連行（強制移入）」の経緯

「外務省報告」はその移入事情（第一分冊）の中で、中国人強制連行は「華北勞工協会」が主導して行い、その供出率は全体の八九・一％を占めていたと、報告している。

戦時下に出版された「特殊労働者の労働管理」（山海堂、一九四三年）によれば「華北勞工協会」は華北政務委員会（日本のカイライ政権）の指導で、一九四一年七月に行政機関として北京で設立され、主に旧満州国や華北地域内の労働者の調達と移入を任務としていたと、記録されている。

その強制連行は「華北勞工協会」の供出命令で、占領地域の省から町村への割当てによる強制的な「行政供出」と呼ばれたが、それは地域住民に対する強制力をもなった強制連行であった。

また、現地の日本軍も行政機関の「供出」要請に応じて、「勞工狩り（うさぎ狩り作戦）や八路軍殲滅作戦を行い、労働者や俘虜の確保に全力を上げていた。

「勞工狩り」はどのように行われたのか、中国戦線の後背地に、中国共産党によって解放区がつくられると（解放区は中国共産党の根拠地であった）一九三七年八月、共産党は国民党の合意のもとに華北にある自らの軍隊を八路軍、当初の兵力は三個師団四万五千人、として編成し、国民党から武器、弾薬、資金の供与を受けていた。戦闘区域は山西、河北、山東の三省であった。正規軍とゲリラ戦を組み合わせて、日本軍を苦しめた。また、八路軍は決して住民に迷惑をかけない軍規厳正な軍隊としても有名であった。共産党直轄の軍隊としては華中、華南を戦闘区域とした新四軍もあった。

日本軍は占領地域を治安・準治安・未治安の三地区に分け、解放区などの未治安区では「一般民衆と分離判別するは困難」なので、「通常その住民の全部または大部分が共産党員または行政組織、外郭団体関係者にして同地区に対する保衛は至嚴なるを通常とす」として、徹底的な殲滅作戦を展開した。これが中国側のいう「三光作戦」であった。

三光作戦とは、中国語「焼光、殺光、搶光」の表現である。日本軍が中国住民に対して行った蛮行を指して使われた。「焼き尽くし、殺し尽くし、略奪尽くす」の意味である。実態は日本軍の三光による蛮行の嵐が中国大陸の各地に吹き荒れたのである。特に中国共産党の支配地域、抗日的な区域への大規模な掃討では、大量虐殺、大規模な破壊が行われ、そこで捕まえた俘虜・共産党関係者とみなされた農民などの多くが、各地の收容所へ送られていった。

また、一九四二年以後は、「精密掃討」として「兎追い戦法」がとられた。これは「一列縦隊の各分隊を約五百米の距離間隔に分散し、敵を求めてこの網中に追い込むという方式」（防衛庁防衛研究所戦史室「北支の治安戦」）で、住民を一網打尽にし、働けけそうな男を收容所へ送り込む戦法が各地でとられた。

現地で連行された労働者は各地の特殊訓練所に收容し、様々な訓練と教化を受けさせて送り出す「訓練供出」の方法が採られている。他には失業者らに好条件を与えた「自由募集」、荷役労働者らを特別の緊急要請で供出させた「特別供出」などもあった。

こうして、捕らえられた彼等は漣沽、青島、連雲などの港から、日本に向けて收容所を出発した中国人の数は、少なくとも四万一千七百六十二人に達したが、実際に乗船したのは三万八千九百三十九人であった。その差の二千八百二十三人が乗船までに死亡したか、逃亡した人数であった。

また、日本に上陸してから事業所に配分され、着くまでにも死者が続出し、「歩けないのはタンカで運び、顔は土色、手足はむくみ」と目撃者が語るほど、非道な方法で行われた強制連行であった。

（中国人強制連行事件資料編纂委員会「草の墓標」より）
戦後、中国人労働者たちの多くは「就労中の労働、待遇問題もあるが、中国現地で供出された時の不満」が最も多かったと指摘されている。

● 戸狩山・中国人捕虜の生活
歴史に埋もれた地下壕
1993・3・10

一九四三年（昭和十八年）七月の午後十一時頃、私（石玉海）は急用のため友達を訪ねる途中でした。物陰から襲ってきた日本の憲兵に強制的にホロ付きのトラックに押し込まれ、拉致されたのです。その時以来、上海郊外にあった我が家を二度と見ることはできませんでした。私の十六歳の時でした。上海市内の収容所から船に乗せられ、下関に着いた。我々三百八十人は三班編成されて、東日本造船の函館造船所に連行されました。

「私（張来栄）は山東省で農業を行っていた。ある日、町の市場へ買い物にかけた時、銃を構え日本兵に市場を包囲されてしまった。私たちは一ヶ所に集められ、年の若いだけが選ばれ、全員がトラックに押し込まれて拉致されたのです。三十人ぐらいの若者ばかりでした。青島の波止場へ行くと



何千人もの中国人が集められていた。貨物船の鉄鉱石と一緒に日本に向かい、私は北海道の赤平炭坑の川口組の事業所に連行されたのです。一九四四年（昭和十九年）の事でした」（十五年戦争史学習資料下・安達喜彦編著・平和文化発行より）

また、山東省出身の撫順炭坑の元労務者は「村祭りの人出でにぎわう通りの両端を日本兵にふさがれてしまった。私は逃げられず、捕まって収容所へ送られた。

青島の港から、船と列車で撫順（炭坑）に連行される時、二人ずつ手錠を掛けられた。逃亡防止のためか、収容所に入った時に指紋が採られ、また、炭坑でも指紋を採られた。坑内の過酷な労働、飯場の劣悪な生活に耐えられず、逃亡者があったが、見つかる指紋の照合で戻され、見せしめに仲間の前で非道な拷問が行われた」と、証言している。

このように、人出の多い町や村の祭りの場所で、耕作中の田や畑で容赦なく拉致し、強制連行する方法が、現地では公然と行われた「人道に対する犯罪」であった。

一九四六年（昭和二十一年）三月に作成した「外務省報告書」によると、長野県の本曾谷へ移送された中国人は「間組御岳作業所（玉滝村）」ほかの各事業所を含めた連行者は合計で二千十四人だったと記録されており、もっとも多かったのは「間組御岳事業所」の七百二十三人であった。

その大半は八路軍の俘虜や国民政府軍の投降者に加えて、河北や山東、山西省などで拉致（らち）された一般住民も含まれ、なかには、寝込みを襲われ、連行された農民たちも含まれていた。

加藤 明 編

< 事実を鋭い目で ····· >

本来、歴史はみんな残るものであって、残らない歴史なんかはないはずですが。

ただ「残さない試み」がなされ、「残らなかった歴史」があるだけです。

歴史家だけでなく、歴史を学ぶ者・一国民としての私たちも「消されたもの」を掘り出す努力をしていかなければなりません。

また、「消されようとしているもの」については、それを消そうとしているものと戦って、それを歴史として保存して行かなくてはなりません。

私たちは、子供たちに孫たちに、どんな事実も知らせ、歴史を伝えていき、その中であるものを決して消そうとしてはいけないのです。

それなのに、その事実を消そうとする試みがあります。消そうとするものに対しては怒りを持って立ち向かって行かなくてはなりません。

「怒る」とは、感情を爆発させることなく、ただ見るのだけでなく、鋭い目で見て奥の奥まで見通していくことなのです。事実を冷静に見つめ、見通すことなのです。

そこから何か光るものを見つけ、更にもうひとつ先が見えるようになることが大切です。



花岡事件

岐阜大学教授（歴史学）

堀越 智

・中国人殉難慰霊碑について

戦後二十数年を経過した頃、瑞浪市の主催で中国人殉難慰霊祭が行われるようになった。10ページに述べた中国人捕虜の慰霊祭である。昭和20年の4月頃のことだと記憶しているが、数多くの中国人捕虜が明世町戸狩地区へ連行されて来た。目的はサバ山に掘られた軍需地下工場での労働に従事する為であった。昼夜を問わず、この人達には苛酷な労働が待っていた。日が経つにつれて病死する者、割れる者が続出した。しばらくすると、化石山の麓から死体を焼く煙が立つ様になった。松根油で焼ける死体の匂いと煙が周りに立ちこめる光景を見ながら、異様な雰囲気を感じていた。日中関係が友好的になった頃から、この人達の霊を供養しようと日中友好協会の人達の尽力で慰霊碑が建立され、毎年の9月18日に慰霊祭が行われてきた。（この日は日本による中国侵略記念日である）この日には瑞浪市長を始め、関係者が一堂に会して慰霊祭が行われる。

戦後、日本政府の代表が参列したという話は聞かない。誠に申し訳ないことをしたという心があれば碑の前で殉難者へのねぎらいの言葉があってもよいのではないか。岐阜の西本 明さんはこの中国人捕虜問題に関する調査をした人の一人である。私も中国人捕虜に関する資料を届けていただいた。この資料を見ると捕虜達は日本のトップ企業の間組の下で働いたことが判る。ここでの労働条件は苛酷なものであった。監視人は厳しく見張り、殴り殴り倒す。蹴り蹴り上げる。叩き叩きのめす。数々の暴力で痛めつけられた者や食べ物も十分に与えられずに病死した者、痛めつけられて死亡した者の霊が化石山に宿る。追悼の辞。黙とうを捧げる。二度と悲惨な戦争や非人道的な行為を繰り返さないことを私達は誓い、決意する。

＜学童疎開●日本の学童疎開＞

＝岐阜県の学童疎開の実態3＝

“学童疎開、始まる。

- 名古屋市丸田国民学校児童(276人) 虎溪山水保寺・土岐町の尚武会館に到着する。多治見駅には精華校の5～6年生が出迎える。瑞浪校へは3～4年生が、多治見では精華校へ5～6年生が集団疎開を完了する(1944・8・11(観戦))
 - 名古屋市牧野国民学校児童(604人) 竹ヶ鼻駅着～光照寺他11ヶ寺に分散して疎開する。トラック4台分の荷物を各所へ運ぶ(10日)全町挙げて歓迎式。音楽隊を先頭に第一国民学校まで行進、町長・校長・児童等の出迎えを受ける(12日)付き添いの父母達も同行する(32名) 八剣神社で奉告祭を行う(8・14)
 - 名古屋市愛知国民学校児童(314人) 墨俣町に集団疎開完了(8・12)
 - 名古屋市庄内国民学校児童(408人) 八幡町に到着(8・12)
 - 名古屋市池内国民学校児童(230人) 不破郡願鉦寺に到着(8・13)
 - 名古屋市六反国民学校児童(316人) 揖斐郡池田町に到着(8・14)
 - 名古屋市古新国民学校児童(297人) 揖斐郡大和村の善明寺・真教寺・大乘寺に分宿する(8・14)
 - 名古屋市松元国民学校児童(248人) 揖斐郡小島村に到着。瑞巖寺・速行寺に分宿する(8・17)
- 以上の他、多数の疎開があった(蔵)

＝学童疎開の実態25＝

＜縁故疎開の回想＞

「おぼさん、名古屋はなあ、空襲でな、ひどいもんや。今度、“明。だけ疎開してくるで、頼むな」

「そうやってな。爆弾で沢山、人が死んだげな、新聞に書いてあったと」

二学期が始まる前日、僕は戸狩の母の実家に着いた。夕方、手土産の缶詰めを持って、挨拶回りに行った時の話である。

翌朝、明世国民学校へ挨拶に出かけた。「名古屋から戸狩へ疎開してきた“加藤 明。です。よろしくお願ひします」

校長室の挨拶を終え、学校への転入の手続きが終わり、担任の“伊藤 こと。先生に連れられて教室に行った。

転入する事を聞いていたのか、教室は静かだった。教壇の前で挨拶をして、ふと見ると姻戚になる“タチ子。がいた。敏彦君の顔も見たので、なんだか気持ちが落ち着き、安心した。後で、先生は母と以前からの知り合いだと聞いて嬉しかった。

「あきら君、一緒に学校へ行こう」

と、もの珍しさも手伝って、近所の子達が誘ってくれたので、楽しく通学できた。



通学用に履いた“わらじ。

＜学童疎開●日本の学童疎開＞

＝岐阜県の学童疎開の実態4＝

1944(昭和19)年初頭から、先ず縁故疎開として始まった疎開は8～9月の時期に大々的な学童疎開となって学校・地域に大きな影響を与えた。

この状況の中、文部省は9月14日、各地方長官宛に「集団疎開学童ノ教育ニ関スル件」の通達を出している。

①集団疎開学童ノ教育ニ関スル事
ハ受け入れ側トノ緊密ナ協力ニヨリ行ナウモノトシ、現地ノ実情ニ即シ……

②授業ハ地元国民学校ノ教室ソノ他教育上適当ナ施設ノ供与ヲ得テ行ウ……

③受け入れ側府県ハ疎開側府県ニ協力シテ学童ノ教育ノ指導監督ニ当ルコト……

以下、全部で8項目の指示通達内容であった。しかし、現状は混乱と困惑な状態であった。一度に数百人の学童を迎えて、教室数の不足や学級人数の増加に悩む事になった。



＝学童疎開の実態26＝

＜縁故疎開の回想＞

祖父母宅で過ごした約一ヶ年間、生活で経験する全てが「初体験」となった。

「ばあちゃん、この玉子何処で、とれるや」

「あんな、玉子はニワトリが生むんや、明日の朝、小屋へ行くと分かるぞ」

当時、玉子は貴重品であった。盆とお正月の時、食膳に載る物であった。それを毎日、朝食の御飯にかけて食べていた。裏の鶏小屋には20羽位の鶏が飼ってあった。

「あっ、玉子が出てきた」

朝から鶏小屋へ行って、鶏が玉子を生む様子を見た。すごく、感激してしまった。

食生活で使われる、「ごせん」(茶碗・おわん・箸が入った箱)を使って食事をする事や飯台、おひつ、ゴザ、貝サジ、クド、火吹竹、ゴウ、井戸、セイロ、石臼、スリ鉢、等の名称を覚えたのも、この頃であった。

稲刈りの季節になったある日、祖父母達と田んぼへ行った。

「稲を刈ってみるか。ばあちゃんのやる事をみてやりな、大丈夫だぞ」

初めて見る“稲刈り鎌。を持って、初めて稲刈りをした。稲を束ねる事、束ねた稲をハザ(稲を干す竿)に掛ける事、刈り取った田んぼから、落ち穂を拾う事、濁いた稲束を足踏み脱穀機で籾を落とす事、籾すりに掛けて、玄米にする事、玄米をついて白米にする迄の農作業を覚えた。どの一つの作業も珍しい仕事であった。農作業に着る物も覚えた。

物事を知る、覚える楽しさを持った5年生の僕は田んぼや畑仕事、薪を取りに行く事も新鮮な興味と関心の対象であった。友達が増えて、行動範囲もどんどん広がって行った。

＜学童疎開・日本の学童疎開＞

＝岐阜県の学童疎開の実態11＝

「粉碎せよ！学童疎開の流言、父兄は明るいいで」（1944・9・20新聞）

学童疎開に対するデマの一例を上げ、不安な気持ちを警告した。

「ある学校の女教師が児童に厳しく、殴るので児童が自殺をしたとの噂が父兄の間に広まったので、父兄代表が疎開先を訪れた所、児童たちは、疎開生活を楽しんでいた」を報じている。

こうした噂やデマは、まだ見ぬ疎開先の不安や心配した心が、「病人が続出。『食べ物がなく、痩せ細っていた。』仕事で酷使されている。等の流言となって広まり、父兄たちの動揺となったのである。

しかし、戦局の悪化と拡大は我が子を案じる親の気持ちをいっそう動揺させて行った事も事実であった。



サバ山で掘削作業する人達

＝学童疎開の実態33＝

＜縁故疎開の回想＞

＜“私と戦争、私の戦争体験より”＞

1945年の早春、朝の出来事であった。

「おい、捕虜だ、中国人だそうだ」

「サバ山で働らかされる捕虜たちだぞ」

口々に叫んだり、大声で喚きながら、僕たちは細い田舎道をよろけながら、たどたどしい様子で歩く捕虜達を、家の前で眺めていた。

これが世界的な大事件となる「中国人捕虜虐待・強制労働事件」の発端であった。

これから始まる出来事の数々は終生忘れる事ができないものとなった。

＝憲兵や兵士達が銃を突きつけ、手を繋がれた中国捕虜たちを囲む様にして、瑞浪から戸狩へ連行して来た。列は長く続いた。

1944年を迎えると、戦局は敗戦への道を進んでいた。B29爆撃機による都市と軍需工場への集中爆撃は日に日に激しくなっていた。

そんな情勢の年末から、「地下軍需工場」建設工事が本格的に戸狩・月吉地区の山々を中心に行われ様としていた。

強制連行され、日本各地の炭坑やダムで強制労働に従事していた「朝鮮人」労務者達が家族と共に集中的に戸狩地区を中心に移住し、その数は数千人に膨れ上がっていた。

各地区の家庭は、離れ屋敷・小屋・納屋を提供して協力した。また、サバ山に通ずる道路脇には工事関係者の仮説住宅・将校用住宅が立ち並び、多くの機材・木材・資材等がうす高く積まれ、大工場地帯に変貌していった。

サバ山を見渡す山々は、僕たちの遊び場であり、作業の様子を見学する山でもあった。

＜学童疎開・日本の学童疎開＞

＝岐阜県の学童疎開の実態12＝

恵那郡に集団疎開した木下 信三は「学童疎開小概＝少国民の行く方＝の中で、自らの体験を踏まえて、次の様な事実を書いている。

「名古屋の空を眺めて流す学童たちの涙をよそに、紙上には“疎開児童はこんなに元気。”お米はお美味しく、野菜は大好物。と載ったが、実際に面会にいった時、その生活の悲惨さに驚き、強引に連れて帰った親もいた。

また、施設の善し悪しもあった。付知は旅館、田瀬は公民館、福岡は集会所、高山は裁縫室であった。私の居た田瀬は板間に藁むしろを敷いたもので、ノミ・シラミ・南京虫の巣になっていた。

食料事情もその土地によって差異があり、疎開児童たちの食事が左右され、空腹で過ごした現状が報告されている」といった、疎開とは何であったかが、今、問われている。



サバ土を“もって、で運ぶ

＝学童疎開の実態34＝

＜縁故疎開の回想＞

「おい、あの煙りは何だろう」

「ばあちゃんが、言っとたけど、中国の捕虜の死体を焼いたらしいぞ」

「ほんなら、いっべん、見にいこか」

向こうに見える化石山の岩膚は、夏の暑い日差しで、白く光っていた。山は静まり、物音ひとつしない静寂さを保っている。

僕らは汗をかきながら、深く生い茂った草をかきわけながら、山道を登っていった。

煙りは、北向き斜面の凹地から、立ち登るのを確かめながら、良く見える地面に立った。

急に異様な臭気が鼻につき、何かが燃える様子を、思わず立ちすくんでしまった。そこは“死体を焼いている。現場だった。三人は、物音を立てずに、しゃがむ姿勢になった。

そこには、指導監視人や捕虜たちが戸板に寝かせた死体を焼きながら、取り囲むように立っていた。

監視人の一人が、燃えない死体を棒の先でつつきながら、薪をくべていた。その時、油を注いだらしく、ポッと音がして、炎が立ち昇り、肉が焼ける様な匂いが襲ってきた。

しゃがんで見ていた僕らは、急に恐くなって、少しずつ後退りをしながら、山の麓まで息を切って逃げ帰ってきた。

「恐かったなあ、みんなに話したらあかんぞ。ばれたら、叱られるで」

中国人捕虜は過酷な掘削作業の為に、病気・栄養失調・事故等によって、連行された330人中、39名の尊い命が失われている。

その霊を慰める「中国人慰霊祭」（毎年9月18日）が行われている。異国の地に眠る中国人の霊よ、安らかであれ。合掌！念仏！

岐阜県下における調査と
殉難者遺骨の収納

※岐阜の西本 明さんから送っていただいた資料より、
岐阜県下には全体として次のように殉難事件があった。1953年
以来、数年間にわたって、この調査を中心的に行ってきた日中友好
協会岐阜支部の西本 明さんは調査の状況を次の様に語っている。

・事業場名(年月日)	・連行状況	・死亡
1. 鹿島組各務原作業所 (1945.6)	御岳より374名	3名
2. 間組瑞浪作業所 (1945.4)	御岳より330名	39名
3. 飛鳥組川辺作業所 (1945.5)	御岳より270名	4名
4. 熊谷組高山作業所 (1945.9)	熊谷富士より202名	3名
5. 熊谷組各務原作業所 (1945.6)	熊谷平岡より513名	23名

1953年に中国人捕虜殉難者慰霊実行委員会から日本中国友好協会岐阜支部へ送付された資料により、岐阜県下に関係事業所が5ヶ所あったことを知った。その頃、戦時中に間組瑞浪作業所で働いていたという大垣市在住の朝鮮人某氏から、中国人捕虜が労役に従事しており、牛馬にも劣るひどい酷使によって多数の死亡者が出たことや一人の逃亡者のあったことを聞いた。同年はじめから支部活動を始めていた私は、県下5事業所のうち39名もの犠牲者を出した瑞浪作業所の現地調査をしようと思い中央から資料をもらい8月下旬に現地へ向かった。

途中、多治見市役所や地区労の方に当時の状況を尋ねたが、詳しい事は地元(明世村戸狩)でないとわからないとの事だった。土岐郡明世村役場(現瑞浪市に合併)へ行き、村長須藤治兵衛氏に会ったが何も判らなかつた

「中国人捕虜・朝鮮人」に関するもう一つの証言

続編1

敗戦、前の年から明世村戸狩地区の人口は地元村民約150人を含めて3千人に急増していた。土岐川の対岸にあたる小田地区や外の地区にも約500の朝鮮の人達が生活していた。軍人・軍属、工場関係者、中国人捕虜、朝鮮の人達で静かな田舎の集落が一度に戦時の様相に変わって行った。

戸狩地区には荒神山史跡の麓に東海軍の本部があった。外に高級将校・下士官や軍人・軍属の宿舍が道路に近い空き地に建てられた。間組の工事関係者とその家族や朝鮮の人達が地元の家に間借りや改造した家屋に住んでいた

こんな状況下、サバ山で地下軍需工場の掘削工事が始まった。御岳から移転してきた「中国人捕虜達」はサバ山と裏山とに囲まれた平地に建てたバラック小屋に入り、終日、掘削工事に従事していた。小屋の周囲は厳重な監視下に置かれ、常時、監視人や軍人達が警戒の目を光らせていた。

地下壕内の様子は直接見ることはできなかつたが、裏山から見る資材や物資の運搬をする人達や土砂を運び出すトロッコの様子等の騒然とした工事現場は今でも忘れることができない。

9月3日、明世村戸狩地区に在る一軒家をスライド撮影した。敗戦当時、地下軍需工場建設の為に移住してきた朝鮮の人達が住んでいた裏納屋である。現在、残る住居跡の一つである。何十年も人の住まない廃家になっている。当時、鶏小屋や納屋を改造した住居跡はもう無くなっている。

この後、幸運にも畑仕事をしていた加納真年氏に出合って当時の話を聞くことができた。加納 真年氏は18才の時、志願兵として応召し陸軍通信兵となる。東南アジアへ向かう輸送船が沈没した為に帰隊除隊となり戸狩の自宅へ帰っていた。その後、中国人捕虜収容所の指導監視人となる。この仕事が加納氏の青春時代の貴重な体験となる。

加納 真年氏の話によれば当時の捕虜収容所(華工収容所)は二ヶ所あった。一つは「サバ山」の洞にあり、他は「ほんご洞」にあった。そこは高いバリケートで周りを囲んでいた。第一華工収容所には二個中隊編成(150人)の中国軍人達が収容されていた。八路軍と国府軍の混成部隊で将校が統率していた。第二華工収容所には満州鉄道の警備人や狩り集められた浮浪者達が入っていた。彼等の主な仕事は物資の運搬や地下壕の掘削作業に従事したが、労働力にはならなかつたようだ。暑さと過酷な労働から病気(栄養失調)や事故等から故郷に還れずに死亡した中国人は330人中39人になった。無念な心。

教科書にみる「戦時学童疎開」の記述はどのようなものであったかを調べてみた。

空襲が予想される状況となった1943(昭和18)年12月、「都市疎開実施要綱」が閣議決定された。

その後「一般疎開促進要綱」を経て、1944(昭和19)年6月30日、「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、7月17日付けで発表となった。

その間、6月には米機が北九州に来襲、マリアナ沖海戦では日本海軍が敗北を喫して、戦局は開戦以来の重大な危機を迎えている時期と重なっていた。

“1944年には、米軍による日本本土に対する空襲の危険が高まったため、都市の小学生は親元を離れ、遠くの農村などへ集団で“そかい”することになりました。子どもたちは、そまつな食事による空腹と家に帰りたいさびしさをがまんしながら、つらい毎日を送りました。

(新社会 6上 雑誌 昭和22年夏)

1944年8月5日、第一陣出発。“中部日本新聞”発表は、集団疎開児童数32745名と記している。

「疎開」という語は、戦前、戦中世代にとっては、一生忘れられない言葉である。ところが「疎開」は戦前の辞書には載っておらず、太平洋戦争中に作られた“新語”である。

それでは、「疎開」という言葉は、いつ頃歴史の表舞台に登場するのか。

永井 荷風は日記「断腸亭日乗」昭和18年の大晦日の欄外に「疎開ト云フ新語流行ス 民家取り払イノ事ナリ」と朱書している。

1943年この年は日本軍の退勢著しく、本土空襲は必至とみて、防空態勢を固める必要があった。春頃から、「疎散」という語が登場してくる。蒋介石の拠点重慶が空爆に耐えかねて、人口の強制疎散を始めた事から、我が国の空襲対策として、人口の疎散、老幼の疎散の政策が考えられたと思われる。

1943・9・22政府情報局が九大方針を新聞発表した。その見出しは“重要都市官庁等疎開”であった。以後、完全に統一して「疎開」の語が使われている。

「疎開」の語の出所はどこか。実は陸軍の「歩兵操典」に出てくる。その意味は、密集した隊形や隊列の距離間隔をまばらに開くことで、戦闘、攻撃用語として出てくる。

—とよみん だより no196 1990・1—

<筆者・岐阜県立図書館長 原田 政彦>
今や、「学童疎開」を直接体験された人達も、みな、50代半ば以上の人達となってしまった。

明治維新後、明治政府は「富国強兵」の政治を押し進めた。

富国政策では、資本主義経済を発展させ、国の財政を豊かにすると同時に、「徴兵制度」を設け、軍備と強兵を充実させ、欧米列強に対抗する武力作りを目的とするものであった。

特に、日清戦争(1894・昭和27年)日露戦争(1904-5・昭和38年)に戦勝した我が国は、世界に“日本の実力”を誇示しながら、一路、「帝国主義」の道を歩み始め、列強の仲間入りを果たした。

1905(昭和38)年、日本は韓国と「第二次日韓協約」を結び、外交権を握った日本政府は、京城(ソウ)に韓国統監府を設け、「第三次協約」後は、司法・軍事・警察権を握って、実質的な支配を続けながら、植民地化を進めていった。

1910(昭和43年)、日本は韓国の併合を強行し、韓国を朝鮮と改名して「朝鮮総督府」を置き、完全に支配下に収めた。

その後も、天皇の名による「皇民化政策」を強行していった

疎開先で見聞した「中国人捕虜達」の事を忘れる事ができない。彼等は、地下トンネル工場建設の為に急遽、御岳ダム工事現場から集団的に連行されてきた。

彼等が戸狩の「ヘソ山=化石山」へ到着したのは、膚寒い日が続く1945年4月初旬だった。

当日の早朝、連行されて来る中国人捕虜達は軍属の罵声と軍用トラックや馬車の騒音で村の人達の注目を浴びた。

「あれが、中国人捕虜だぞ。むごい格好してるね」

「ヘソ山の穴掘りに来たのだよ」

「あんなに弱っているのに、動けるかね」

まだ、膚寒い早朝の時刻なのに、ボロボロの軍服を身にまとい、疲れた様子の彼等は仲間同士が身体を支え合いながら、歩いて来た。

「速よう歩かんか。この野郎」

手にした棒を振り上げる監視人達の叱咤する声が周りに響く中を、歩けない状態の兵士達が馬車に乗せられ、ゴトゴト揺られて行った。

兵士達は誰もが疲れ切った表情をしていた。首はうなだれ、髪は乱れ、うつろになった目を前方に向けて捕虜達は目的地の「ヘソ山」までの道のりを、ゆっくりと連行されて行った。

「付いて行ってみよか。どんな所か、いっぺん見たいでな。みんなついて来いよ」

少し離れた距離から、中国捕虜達の後を恐々と友達と「ヘソ山」まで行って来た。

彼等の主な労働は砂岩の掘削と運搬であった。

—＜私の暑い夏・22＞—

朝鮮総督府は「朝鮮支配化」と「皇民化政策」を進める為に卑劣で残酷な政治を行った。

朝鮮民族の言語・財産・土地資源・農産物の収奪を始め、

- 徴兵制度と志願兵の調達。
- 勤労働員と軍事教練の実施。
- “創氏改名。(旧姓を抹殺)
- 歴史(天照)教科書の強要。
- “愛国班。の綱の目。
- “興亜奉公日。の設置。
- “皇国臣民の誓詞。の強要。
- “女子愛国挺身隊。の結成・娘狩りと従軍慰安婦の徴用。
- 神社参拝と神棚の強要。

の諸制度を設け、「皇民化」支配を一層強めていった。

この制度の運営と実施には軍隊と警察の力が発揮され、際限なく強行された。

これらの内容に関する参考文献には次の著作がある。

*「日本は朝鮮で何を教えたか」

(著・細 眞 あり出版・1987年)

*「天皇と朝鮮人と総督府」

(著・金 一 龍 龍 龍・1984年)

*15年戦争史学習資料(上下)

(著・窪 藤・平和社・1985年)

★中国人捕虜達の事2＝トロッコ事故

捕虜達の收容先は現在の「日中不再戦の碑」が建つ「ヘソ山」一帯の凹地と“ボンゴ洞”にあった。荒れ地と洞を開墾して建てられた5棟の「華工收容所」は、厳重な囲いと軍属による監視下に衛られていた。

中国人捕虜達は毛 沢東の「八路軍」と蒋介石の「国民政府軍」の混成部隊であり、もう一組は浮浪中国人達であったが、捕虜達に対する監視は厳重なものであった。

田圃に水が入り、田植えの準備に入る頃から昼夜兼行のトンネル工事の掘削が始まった。

間組事務所の開設、下請けの「飯場」が各所に建設されると、多国籍の人達の往来が激しくなり、日毎に苛酷な状況になっていった。

夜間のダイナマイのの爆破音は、静かに眠る村民の耳に轟きとなって響いた。

また、ヘソ山に通じる道を急ぐ足音や機材を運ぶ人の様子が耳に伝わって来ると、不眠を訴える村民もいた。

作業に朝鮮人労務者も加わり、苛酷な掘削作業が強行された。人力に頼る工法は過重な労働に繋がり、過労で倒れる者や事故で死亡する者が相次いだ。

ある日の夕方、「オーイ。事故だぞ、捕虜がトロッコで足を引かれた」「相当にひどい怪我の様だ」負傷者が收容所に着くと、軍医が呼ばれて治療に当たったが片足切断の結果、数日後に死亡する事件が起きた。この捕虜は「火葬」の後、仲間の手で山麓に埋葬された。

—＜私の暑い夏・23＞—

「真珠湾攻撃から五十年を迎える1991年、中国では1931年の柳条湖9・18事変(瀋陽)60周年を記念して巨大な“碑”が建てられ大きな関心となっている。

また、日中戦争勃発地点となった“廬溝橋”にある「中国人民抗日戦争記念館」は連日、青少年の参観者であふれ、「愛国主義教育」の場となっている。

真珠湾は、柳条湖、廬溝橋の延長線上に位置付けられており真珠湾以前に、すでに戦争が始まっていた歴史の事実を忘れない様、中国の指導者は繰り返し真実を伝え様としている。

中国の一般的な歴史認識は、柳条湖9・18事変で本格的に始まった日本の中国侵略が、廬溝橋7・7事変で日中戦争に発展、更に真珠湾攻撃後は第二次世界戦争の一環となった、という見方をしている(1991・12・6 翻 翻 翻)

中国人捕虜達や「劳工狩り」された民間人は、日本各地の炭坑、ダム、トンネル等の難工事に連行従事、悲惨な生活や過酷な労働状況下にあった。

★中国人捕虜達の事3＝悲惨な食生活

「大東亜共栄圏」を旗印に開戦した東条内閣は国民に対して、「国家総動員法」による物資の統制と運用を強要した。米を始め、金属類・貴金属類等が“戦争協力費”となった。

戦争が3年目に入った1943年頃には、銃後の国民は物資不足の為に、困窮な耐乏生活を押しつけられ、「どん底」の生活にあえいでいた。

特に、食料不足は深刻な危機状態となっていた。米や麦が無く、“うどん”、“いも類”、“穀類”、“野草類”の「代用食」と呼ばれる食べ物が食膳に上がる様になった。

成長期に当る学童の多くが、昼御飯もなく水を飲んで我慢した事もあった。“サツマイモ”が一つだけ入った弁当箱を恥ずかしそうに開けて食べる子もいた。また、炒り豆をそっと噛む子もいた。

しかし、戸狩りにあった「組事務所」や「飯場」では、大きな釜で炊かれた「ギン飯」があったし、“親方”と呼ばれた家庭にはいつも豊富な缶詰めや食料があった事も見て知っていた。

家族持ちの朝鮮の人達には大豆が大量に配給されていた。

しかし、中国人捕虜達の食事は近所の噂では粗末な糠入りの「塩パン」であった。

みかねた土地の老婆が彼等に“蒸し芋”を与えた事件があった。この事件は双方が「罰」を受け、「厳重な注意」の達しがあった。

終日、過酷な労働に携わっていた彼等330人中39名の犠牲を出した「化石山」であった。

33年ぶり“悪夢”と“人情”の地へ=かくまった恩人と感激の再会

中国から強制連行され、北海道で逃亡生活をした中国人の“劉連仁(79歳)は33年ぶりに北海道を訪れ、渡辺 静江さんと対面した事を1991・10・21付けの「中日新聞」は伝えている。

記事によれば、1944年の夏、農作業中にいきなり日本軍に捕まり、北海道に強制連行された

当時、42年から軍人を使って始めた「劳工狩り」作戦だった

過酷な労働を強いられ、多数の中国人、朝鮮人が虐待と栄養失調で死亡していく中、45・7・30連行先の空知管内沼田町内の炭坑から、仲間4人と脱走した。

敗戦となって仲間は帰国したが、劉さんはその後も終戦を知らずに道内の山野で逃避行を続けた。1983・2 当別町の山林で保護され、華僑の人達や渡辺さんらの世話を受けた後に、中国に帰国していた劉さんであった。

★中国人捕虜達の事4 = 捕虜逃亡事件

その事件が起きたのは、入梅に入る6月の初旬だった。日中の暑い陽射しから、夕方には小雨がシトシトと降り注ぐ不安定な天候だった。

早期完成を目指す「ヘソ山」の地下トンネル工事現場では、早朝から捕虜たちや朝鮮人労働者達が健康状態の悪化にも係わらず、休息する事なく身体から吹き出す汗に塗れて掘削や運搬作業に追われていた。

捕虜達は入所以来もう2ヶ月経ち、仕事にも慣れ始めていたが、過酷な労働から病気に罹る者や倒れる者が続出していた。

そんな彼等に対して“倦怠”と見た監視人達は「殴る」「蹴る」の暴行が加えた。この現場を見ていた近くの地元民が“噂”を広めた。

殴打された彼等は抵抗する事もなく、口から血を吐き乍ら作業を続けていた。誠に悲惨で残酷な話がこの現場では行われていた。

「お〜い。捕虜が一人、逃げたぞ」

「点呼の時から、居ないぞ」

監視する軍人・軍属や華工指導員達は躍起になって逃亡した捕虜の捜索に当たった。

間もなく、河原の岩陰に隠れていた捕虜が監視人の腕に抱えられて収容所に帰ってきた。

ほどなく、部屋からは捕虜の苦痛な叫び声が周囲に響き哀れさを誘った。

数時間後、全身打撲のまま捕虜は死亡した。早速、死亡診断書が作成され、ヘソ山近くの凹地で火葬にされ、埋葬されたのである。

逃亡による死者はこの捕虜だけであった。

「軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」軍人に賜はりたる勅諭(1882・1・4 勅諭)

“何でもかんでも絶対服従”の観念を教育された皇軍の兵士達は、服従は軍紀を維持するの要道たり。故に至誠上官に服従しその命令は絶対にこれを励行し習性となるに至らしむるを要す(冊 読「程と観と観映 放送」)

日中戦争に突入後、中国大陸に侵略した日本軍は、各地で「三光作戦」を展開した。NHKフィルムで紹介された「石井三郎の回顧・人体実験の作戦を録したものである(録音・焼光・電光の事。(黒羽 清彦・野村 秀雄「日本の侵略-中国-朝鮮」ほる出版)

また、「労力不足の著しき現状に鑑み」中国人や朝鮮人の“劳工狩り(うき狩り)。“女子挺身隊(総務・軍務安撫隊)の強制連行が部隊単位で行われた(録音「朝鮮強襲の記録」太田出版)からも、明らかな事実として国民の知る事となった。

前ページの劉さんの証言の様に、日本の各地で悲惨で残酷な行為が行われていた事が、各種のテレビ報道や写真報道や著作物で、世に問われたのである。

★中国人捕虜達の事5 = 敗戦前夜の出来事

ヘソ山(化石山)へ通じる道路の両側や山腹には、工事現場で使われる資材や機械類が覆いを掛けて野積みになっていた。

荒神山の麓の狭い土地を整地して、組事務所や軍人・軍属達の宿舍が立ち並んだ。また、朝鮮人労働者達の住居は農家の納屋や小屋を改築したものだった。

1945・8・6と8・9広島・長崎両市に世界初の「原子爆弾」が投下された。翌日の新聞紙上には、その被害状況が細かに報道され、国民の全てが敗戦の近い事を悟った。

しかし、地下トンネル工場建設の掘削作業は昼夜兼行で続けられていた。朝鮮人労働者達は組事務所に立ち寄り、指示伝票を持って飯場に出かけていた。また、中国人捕虜達も重労働と栄養失調にあえぎ、無情な殴打を受けながら、ヘソ山の掘削や土砂の運搬を続けていた。

事件が起こったのは1945・8・12~14頃だった。組事務所に勤務する者や軍人・軍属達が夜間、密かに戸狩地区から脱出を謀り、宿舍や事務所から姿を消してしまった(録音「朝鮮強襲の記録」太田出版)

地元華工指導員のK氏の証言によれば、8・10日頃、将校が日本人の関係者を集めて「各自、安全な道を選んで、緊急に退避せよ」との部隊長特別命令を出した事であった。

K氏や監視人達はいち早く捕虜たちの報復を恐れて、地方へ避難逃亡した。

敗戦前夜はそんな混乱状態の有り様だった。

2006年3月5日

《歴史認識が問われる瑞浪市民Ⅱ日韓・日中の歴史認識問題》

今年の九月十七日、瑞浪の戸狩山に建つ「日中不再戦の誓い」の碑前で節目となる第四十回中国人殉難者慰霊祭が瑞浪市供養会によって行われる。

敗戦末期、この戸狩山周辺では航空機の地下軍需工場建設のために強制連行された多くの中国人や朝鮮人の強制労働によって掘られた坑道口が今も数多く残されている。

しかも、この周辺は保存すべき戦争遺跡の聖域でもある。あの当時、昼夜兼行による苛酷な突貫工事が強行され、多くの死傷者を出した現場でもある。その犠牲者を弔う慰霊碑が建てられ、今は記憶された史実が記録として残されている。

戦後の一時期、“戦争史跡の保存を考える”市民グループがこの戦争史跡をどのように保存し、次世代に語り継ぐのかを議論していた頃、瑞浪市ではこの戦争遺跡の一部を利用した「地球回廊」建設の構想が検討され、市長の決断で建設されている。

当時、この建設の是非をめぐって市民団体は“非道の証しを消す”として建設の再考を求める一方、建設後も“強制労働者の立場”で案内板の設置を求めた経緯もあった。

一九九二年十月“地球の歴史を学ぶ”平和的な施設としての起工式が行われ、翌年の五月に「地球回廊」が誕生し、現在に至っている。

その瑞浪市では「平和都市宣言」下でも日中不再戦の誓いの碑や国内で最大級の戸狩山地下軍需工場跡（地下壕）や周辺の地球回廊やサイエンス・ワールドなど各種の施設には数多い方々が訪れ、往時の苛酷だった強制労働を偲ぶ聖域となっている。

毎年行われる中国人殉難者慰霊祭に訪れる中国大使館の方々が“この地域の歴史を教える重要性に言及しながら、若者や教育関係者の数が少ない”ことも指摘している。

それに関連した事実は最も死傷者を多くを出した戸狩山の麓に建設された華工（中国人俘虜ら）収容所跡地に“その歴史を語る”案内板を設置することなく巨大な「市民体育館」の建設を進めた瑞浪市の歴史認識も問われている。

最近、瑞浪市では道路整備に伴う延長案が再浮上し、戸狩山周辺の自然景観を損ない、戦争遺跡をまたがる道路建設工事を再開する動きとなっている。その是非を問う声も議論も少なく、今は決して急ぐ時期でもなく、再考すべき余地もある。

また、「日中不再戦の誓い」の碑や「地下軍需工場跡」を訪れる多くの在日韓国・朝鮮人や中国人留学生が彼らの母国語による案内板がない不公平さを指摘している。その案内板を下記のように設置することを前提に検討したかどうか、と思われる。

① 歴史的経緯とその解説と案内板の設置には白地に黒字が鮮明である。

② 日本語と韓国・朝鮮語、中国語が並列した案内板を設置する。

以前には「戦争遺跡を保存する瑞浪の会」が市側にこの件に関して提言した経緯があるが、今もって実現されず、今後の課題になっている。

今、日本では韓流映画や韓国に関する知識が高まり、今年も「日韓交流年」が続いている。日韓にはねじれた歴史問題もあるが、国内では各地域の「戦争遺跡」の保存問題が高まる中、今後の瑞浪市が目指す国際行政も問われている。

戸狩山周辺には当時を偲ぶ重い歴史がある。市民が一度は訪れ、そこにある歴史と真摯に向き合い、新たな歴史観を育む場になることを願っている。

(後で判ったことだが、須藤村長の息子さんは捕虜収容所の監視員をしており、敗戦後に瑞浪の町で捕虜から袋だたきにされた言われている。もう一人の監視員に会ったら、報復を恐れ、会社・軍部のすすめにより、長野県に待避していたと言っていた。この者は火葬にも立ち会っている。)

その晩、私達は神社にでも寝るつもりだったが、夜、明世小学校に行き事情を話して裁縫室に泊めてもらった。私達が調査に行ったことは警察に知られており、翌朝、村の駐在員が学校へ見張りに来ていた。戸狩山の収容所跡を捜したら、8合目あたりに火葬の跡が残っており、付近の笹藪の中に遺骨が散らばっていた。標識も何もなかった。もっと詳しく手がかりを得ようと、山で働いていた農家の人々に尋ねたり、明白寺の住職和田文承師や近くの少女、朝鮮人にも会っていろいろと当時の状況を聞いて回った。

二度目の現地調査の際、関係医師大竹市正氏宅を尋ねたが老体で体の調子が悪くて会えなかったが、奥さんから、8年前のことで記録が残っているかどうか判らない が調べてみると言われた結果、敗戦当時の診断書を探してもらい、その中に殉難者の診断書を見つけて複写して持ち帰った。以下・・・他事業書関係の文面は省略する。

このような現地調査によって、1953年8月26日に間組瑞浪作業所内での殉難者39名に該当する遺骨を現地火葬跡より発見収集した。

1986年9月20日付けの毎日新聞の記事を紹介したい。この記事によれば、化石山の山頂にある、日中不再戦の誓いの塔前で行われた同慰霊祭の会長である河口 薫氏は個人的にもよく存じている。実直なあの人柄が会長という役職に付かれたのではないか。同氏は敗戦後、満州からの引き上げ者であることや、当時の中国の事情を知る者の一人であることから、中国の捕虜に対する深い思いやりがあったのではないかと思います。当時の困難な時期を考えれば、日中友好の礎を瑞浪の地に確立された業績は大きく、本当にご苦労な事の連続だったと思います。

今後は、一人でも多くの瑞浪市民がこの殉難者慰霊祭に参列し、日中友好の輪を広げる様にしたいと考えます。教育の現場でもこの話をする事が日中友好の輪を広げる大きな意味を持つことになると思います。

「私と戦争体験」と題したこの手記を書き始めたのは、猛暑が続く今年の夏の日からである。

戦争末期の昭和19年の9月に名古屋市立御器所国民学校から、土岐郡明世村立明世国民学校に転校し、敗戦を迎える昭和20年8月15日迄の約1ヶ年の間、明世村戸狩地区で体験したり、見聞した事を是非、手記にしなければならぬと考えたからである。

この手記を書き始める迄の45年の長い間、人に語る事もなく沈黙を守ってきたが、多感な少年時代に体験した悲惨で残酷だった戦争へのこだわりが脳裏に焼き付き、重く心にのしかかる様になってきた今、手記にまとめる心境になってきたからである。

当時、「戦争」という極限状態の中で起こった“中国捕虜の運行情況や死体焼却の様子”、“朝鮮人の生活”は戦後の国民全てが体験したのではなく、たまたま、戸狩地区の住民のみが体験した事である。だから、この貴重な戦争体験者の責務として後世に語り継ぐ事が今後の日中・日朝友好関係を維持発展する上にも極めて大切な事だと考えたからである。

この手記をまとめるに当って、先輩の加納 真年氏、小栗 政明氏達と同窓生の土屋 敏彦(旧姓・加納)、伊藤 壮一郎、宮川 タチ子(旧姓加藤)さん達には大変お世話になったり、励ましの言葉をいただきました。本当に有難うございました。

1990・9・12記

社会 (22)

18歳が見た強制労働

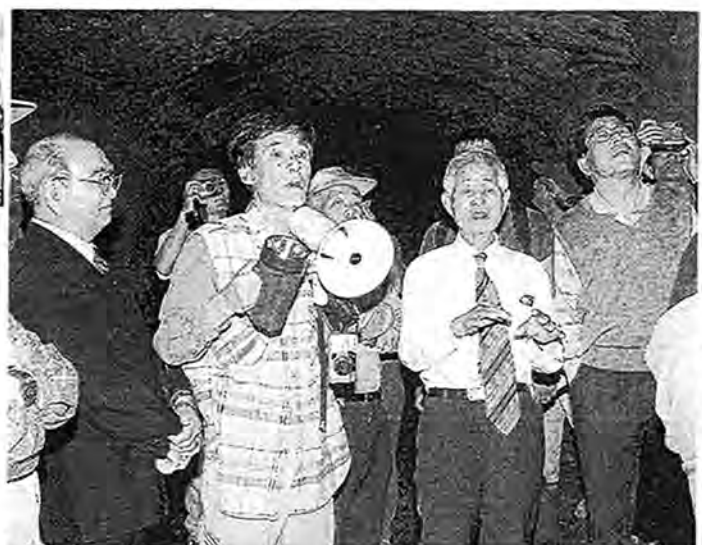
瑞浪で元従業員があす証言 見学会

第二次大戦末期、中国。瑞浪の強制労働につ
人が強制労働を強いられ
た岐阜県瑞浪市明世町の
地下壕跡で二十六日に現
地見学会が開かれ、工事
に携わった建設会社「安
組」の元従業員、伊藤豊
明さん(左)と市土岐町
が当時の様子を証言す

見学会は「戦争遺跡を
保存する瑞浪の会」(安
藤秋義会長)主催。元従
業員のほか、工事に従事
した朝鮮人労働者の梁弘
勤(右から2人目)が、

故で三千九人が犠牲とな
った。
工事の進行状況をチェ
ックしていた当時十八歳
の伊藤さんは、疲労した
中国人を現場監督が暴行
する光景も目撃し、終戦
直後の一年間は報復を恐
れ、県外に逃れていたと
いう。中国人慰霊式典
を報じる記事を目にする
たび、胸がつかえる気が
した」と振り返り、同会
に手記を寄せる一方、

「事実を語り継ぐために
も、証言を決めた」と話
している。
午前十時から開かれる
見学会には、一般市民も
参加できる。問い合わせ
は同会の加藤明さん方
電0572(63)272
4。



手ぶりも交えながら57年前を振り返った伊藤さ
ん(右から2人目) 26日、岐阜県瑞浪市で

「疲労で倒れた中国人が棒でたたかれた」

第二次世界大戦時の強制労働

39人死亡の現場

元従業員が証言

岐阜・瑞浪

第二次世界大戦末期、強制ま」と約四十人を前に説明。
労働の中国人三千九人が犠牲
となった岐阜県瑞浪市明世町
の地下壕(ごう)跡で二十六
日、工事にかかわった建設会
社「安組(現ハザマ)」元従
業員、伊藤豊明さん(左)同
市土岐町が初めて当時の状
況を証言し「かわいそうなこ
とをした」と頭を垂れた。
この日は「戦争遺跡を保存
た。掘削に従事した朝鮮人勞
働者の梁弘勤さん(右)も同
会が開かれ、伊藤さんも参加
した。伊藤さんの仕事は資
材、工事状況の検査で、現場
監督が中国人を暴行するの
目にしたこともあった。他の
工事関係者も口をつぐんだま
まだった。
五十七年ぶりの地下壕につ
いて伊藤さんは「土砂で溝が
埋まっているが、当時のま

元朝鮮人労働者が証言

「戦争遺跡を保存する
瑞浪の会」は二十六日、
瑞浪市明世町戸狩で、戦
時中、地下軍需工場とし
て建設された戸狩山の地
下壕(ごう)などの見学
会を開いた。同工場の建
設を請け負った会社の現
地事務員だった伊藤豊明
さん(左)と瑞浪市、朝
鮮人労働者だった梁弘勤
さん(右)と市土岐町から
当時の過酷な状況が伝え
られると、参加者はあ
らためて平和の尊さをか
みしめていた。
この地下壕(総延長約
七・六キロ)は、川崎航空
機の地下工場として一
九四四(昭和十九)年

から建設が始まった。工
事には、多くの朝鮮人勞
働者や強制連行された
中国人捕虜らが当たっ
た。
見学会には、愛知県瀬
戸市の「瀬戸地下軍需工
場跡を保存する会」の会
員や一般参加者約五十
人が集合。戦争遺跡を保
存する瑞浪の会の加藤明
さん(左)と瑞浪市、朝
鮮人労働者だった梁弘勤
さん(右)と市土岐町から
当時の過酷な状況が伝え
られると、参加者はあ
らためて平和の尊さをか
みしめていた。
この地下壕(総延長約
七・六キロ)は、川崎航空
機の地下工場として一
九四四(昭和十九)年

瑞浪で戦争遺跡の見学会

強制労働の悲惨さ知って



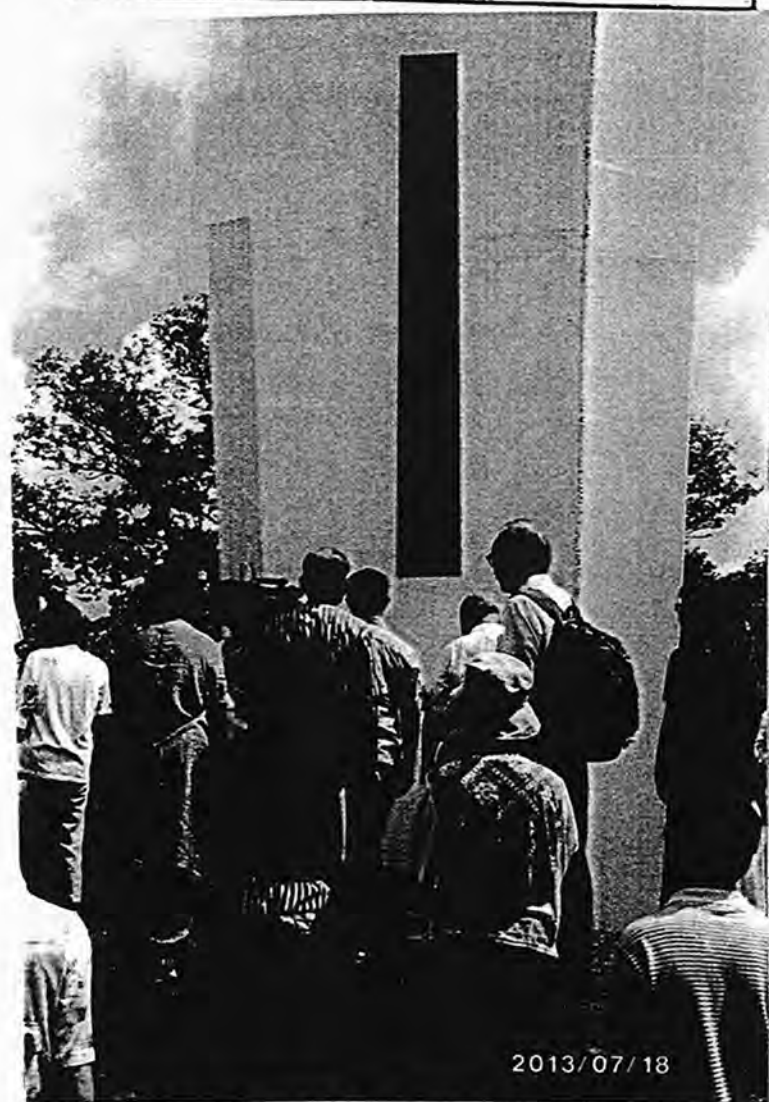
戦時中、地下軍需工場として建設された地下壕内
を見学する参加者ら(瑞浪市明世町戸狩)

戦後70年 語り継ぐ戦争の記憶

中国人殉難者の墓碑

(日中不再戦の誓い)

第二次世界大戦末期、
強制連行された中国人が
航空機の地下工場建設に
従事し、三十九名が尊い
生命を失いました。
再びこのような悲惨な
戦争をくりかえさぬよう
日中友好と世界平和を祈
つて、昭和四十二年(一九
六七)九月に墓碑が建立
されました。



2013/07/18

中国人殉難者瑞浪市供養会

「結び」 ●前時不亡心・后時之師 ―今の生き方の指針

昨年の七月、岐阜市で行われた「朝鮮人・中国人強制連行全国交流集会」に関連して、第四分科会(強制連行と地下壕のフィールドワーク)が瑞浪の釜戸と明世の地で行われた。

前夜の分科会では全国から参加された方々の活発な交流があったが、その一人東京の八王子市から参加された田中憲助氏の著書「中国人殉難者慰霊碑を訪ね、強制連行と強制労働を考える」レポート報告が話題になった。

そのレポート報告は、一九九五年八月十二日の「九五・平和のための証言集会」に招かれ、証言された方々の中から、中国人楊福堂さんの証言を取り上げ、彼の故郷である河北省で起こった日本軍の蛮行や自らが強制的に「供出」された時の経緯を話しながら、日本に連行され、各事業所であった強制労働の実態に加えて「四五年八月十五日を木曾谷から移送された岐阜県瑞浪の「間組瑞浪出張所」の地下工場建設現場で迎えた」時の報告が圧巻であった。

また、一九九六年十一月十二日、「戦時下・中国人強制連行と強制労働の証言を聞く集い」が木曾谷の木曾高校同窓会館で行われた。この集いには中国人宗書堂氏が招かれ、間組・御岳作業所から川辺出張所へ移送された時の状況などの証言を聞くことができた(本文参照)

現在、県下に数多くの地下工場跡地が点在し、残されている。その壕内は今では当時の強制労働を知る証人であり、風化しつつある風景になっている。

この「岐阜県地下壕研究会」は、これらの地下壕の未解明な歴史に光を当て、その実態に迫る調査活動を目的に「真実」の尊さを学ぶ有志が結成した。自主的な研究会であるが、全ての活動に対して意欲的に取り組む決意と実行力が要求される仕事である。それだけ、この調査は重みのある活動でもあり、同時に、次代へと語り継ぐ使命もあると、考えている。

本日、発足する「岐阜県地下壕研究会」が目指す目的と活動に、少しでも生かされ、役立つ書籍になれば幸いである。

一九九七年二月二十三日

岐阜県地下壕研究会代表

加藤 明